

短期大学生の「自閉症」に関する認識

Cognitions of junior college students regarding "autism"

石山 貴章 安部 孝
(こども学科 専任教員)

田中 誠
(就実短期大学 幼児教育学科)

要旨

本研究では、障害児保育の講義で実施した「自閉症について」の小レポートの分析と解釈を通して、将来保育士を目指して入学してきた女子短期大学生の「障害」に関する認識モデルを生成した。さらに、このモデルに基づいて、施設実習に関する事前学習や障害児保育・教育などの講義の内容やあり方について検討していくことを目的とした。

その結果、自閉症の認識に関して浮上した15の概念をもとに、短期大学生の「自閉症」に関する構造モデルを生成し、最終的に【病気なの】【生活・家庭環境】【こわい・かわいそう】【学習力・生活力の弱さ】【発達のおくれ】【特別な手だて】という6つの認識段階レベルが確認された。今後は、この基礎研究を踏まえた上で、一人ひとりに対し半構造的なインタビューを行い、将来、保育士や幼稚園教諭を志望している短期大学生の「障害」に関する認識レベルの構造化の精緻化を図り、保育士養成機関における「障害児保育・教育」や実習事前指導のあり方について追究していくことを考える。

[Keywords: junior college students, autism, short report, KJ method, qualitative research]

【キーワード: 短期大学生 自閉症 小レポート KJ法 實質的研究】

1. 問題と目的

将来、保育士や幼稚園教諭をはじめ、児童福祉施設、障害児者施設で働くことを目的として、短期大学で障害児者教育や福祉、またはその近接領域を学んでいる学生が多い。保育士・幼稚園教諭養成機関においては、個々の学生に対して、保育に関する専門性を養うことはもちろんのこと、幼児教育を実践するにあたっての、ものの見方、考え方や人間としての感性を培っていくことも不可欠であると考える。また、近年、幼稚園や保育所でも、インクルージョンの理念浸透に伴い、統合保育を積極的に展開しているところが多く見られており、幼児教育を担う保育者にとって、障害児の生活や世界を理解していくことは不可欠なものとして認識されるようになってきた。

一方、保育士資格を得るために、20日間の保育園実習はもちろんのこと、加えて施設実習10日間も行わなくてはならない。この施設実習は、児童養護施設や障害児者施設などで行われており、ここでの実習経験は、卒業後、幼児教育を担っていく者にとって、自分自身の現段階における力量把握やこれからとの課題を見出すためにも、かけがえのない貴重な体験の場であると考えられる。

しかし、実際には、短期大学入学までの学校生活や個人の生活経験の中で、家庭的に何らかの事情があつ

て施設で生活する子どもたちや障害児者に対して実際に関わったり、基礎的な知識や情報を収集したりなどの経験も少なく、保育士養成機関で実施される施設実習に対する認識不足は否めない。約1年の事前指導だけでは、十分な力量をつけて実習に臨むことに課題があり、入学後、できるだけ早い段階から、障害に関する認識を高めていくことが短期大学現場に求められている。

よって本報告では、障害児保育の講義で実施した「自閉症について」の小レポートの分析と解釈を通して、将来保育士を目指して入学してきた女子短期大学生の入学時点の「障害」に関する意識と捉え方における認識モデルを生成し、さらに、このモデルに基づいて、施設実習に関する事前学習や障害児保育・教育などの講義の内容やあり方について検討していくことを目的とした。

2. 方法

1) 対象

短期大学で学ぶ1年生(2007年度入学生)、145名の小レポートを分析対象とした。学生については、障害児保育の講義を入学後初めて受講する者であり、「自閉症」についての内容に関する講義は短期大学入学後、一度も受けていない。実施期間は2007年4月

である。

2) 方法

障害児保育の講義で実施した小レポートの内容を検討し、KJ法の分析法に依拠しながら概念分類を試み、分析テーマに即して概念を生成し、5つのカテゴリーへの統合を行った。ここで生み出されたカテゴリーに即して概念図を作り上げ、最終的に、この結果を基としながら検討を行い、施設実習事前指導や障害児保育・教育を実践していくにあたって、学生たちにどのような講義内容やあり方、教育的アプローチが必要であるのかを提示した。

データ分析の流れとしては、(1)データの整理、(2)概念の抽出、(3)カテゴリーの生成、(4)概念図、(5)教育的アプローチの提示となっている。

3) レポート課題

学生に課した小レポート課題のテーマは、「自閉症」について、あなたが考えることや知っていること、感じることをB6サイズの用紙に自由記述で述べてもらうという内容である。小レポートに要した時間は15分であった。回答数（複数回答）707、学生一人の平

均回答数は4.88であった。なお、無回答は一人もいなかった。

3. 結果

KJ法に依拠しながら、各記述から類似の文脈を抽出し、それらに概念名をつけていった。その後、15の生成された概念をもとにしながら、短期大学生の「自閉症」に関する認識について解釈を行った。最終的には、これら15の概念の関係性を絞り、最終的に5つの認識段階のカテゴリーを生成した。なお、各概念におけるバリエーションは多数の類似文から成り立っているが、ここでは、その代表的な文を取り上げて示す。なお、同じカテゴリーとして含まれているもののうち、対極例があったものについても示している。なお、現在においては、不適切な表現内容と捉えられるものも含まれているが、短期大学に入学してくる学生の「自閉症」に関する認識を把握していく上では必要な表現もあるため、語句や文章表現を加工しないかたちで表記していることを了承していただきたい。

1) 病気なの

自閉症を「病気」という枠組みで捉えており、「長く生きられない」「心の病」「生まれつき」などという認識をもっている。これは「障害」と「病気」の概念についての曖昧さや精神的側面に関する捉えの強いことがうかがえる。また、「病気」カテゴリーと類似す

る部分もあるが、「男性に多い」「大人になっても脳は子どものまま」「発作」「誰でもなる可能性がある」など、生物学的な観点から述べているものもあった。さらに、「先天性の障害」「脳器質的障害」という自閉症の生物学的な本質的障害に触れている対極例も見られた。

No.1 病気なの

治るのが難しそう	長く生きられない
心の病気なの・・・？	生まれつきなので治らない
精神的におかしくなる	男子に多い
症状がそれぞれ違う	人により症状は異なる
誰でもなる可能性	大人になっても脳は子ども
発作を起こす	精神病のひとたちとはちょっとちがう
脳の障害である・・・ということを高校で習ったことがある	
病気か障害という考え方では、障害・・・なのかな？ 区別があいまい	

2) ひきこもり

「自閉症」の言葉と類似した感覚として「ひきこもり」も多数挙げられた。上記に示した「病気なの」カテゴリーと類似した概念もあると考えられるが、社会的に問題視されている「ひきこもり」をあえて別枠で浮上させて検討していく必要性があると考えた。この「ひきこもり」概念と「自閉症」との結びつきは、まだま

だ根強く残っていると考えられ、当然のようにイコールとしてこの「ひきこもり」が出てきているように考えられる。また、イメージ的にも、「暗い」「部屋に一人でいることが好き」「自分の殻に閉じこもる」といった認識があり、「自閉症」という言葉のもつニュアンスやイメージのどちらも大きく関与していると考えられた。

No.2 ひきこもり

自分の殻に閉じこもる	外に出ない
自分を出さない	人と接するのが怖い
暗闇	暗いイメージ
部屋に一人でいることが好き	自分の世界にとどまっていることが好き
あるものに捉われて、それに心を閉ざしてしまう	

3) 怖い

学生には、自閉症の特徴やパニック的な行動を「怖い」として受け取っているものが数多くあり、「危険な行動をする」「気持ちの変化によって人を襲う」などのイメージがあることが確認された。また、自閉症

のパニックに対する無理解や拒否感もあり、パニック＝「暴れる」という図式が形成されている。十分な知識も体験もない学生にとっては、自閉症児は「近寄りがたい存在」として映っていることが想定された。

No.3 怖い

危険な行動をする時がある	気持ちの変化によって人を襲うことがある
髪や手などを強く引っ張られそう	叩かれたり、噛みつかれたりする
人ごみにいくとパニックになる	泣き止むまでに時間がかかる
さわぐ・暴れる	いつもと違うとパニックになる
パニック障害になる	ヒステリックになる

4) 奇異な行動

自閉症の行動を奇異と捉えているものが一番多く、理解しがたいものとして把握されていると考えられる。「意味もなく叫ぶ・大声を出す」「自傷行為」「自分の頭を殴る」「噛み付く」「物を一列に並べる」「常同行動」など、自閉症児者と直接、間接的に関わっ

た経験に即しながら、表面的な行動特徴が印象に強く残っているものと考えられる。対極例としては、自閉症の行動を「常同行動」「自傷行動」などとして専門的に理解しているものもあり、このような行動の背景について時間をかけて伝えていくことの必要性を感じた。

No.4 奇異な行動

意味もなく叫ぶ	突然大声を出す
意味もわからず暴力をふるう	同じ言葉を繰り返す
どこへ行くか全くわからない	行動が読み取れない
態度が急変する	完璧にやろうとする
つばを吐く	自傷行動がある
髪を引っ張る	ドアの鍵を全て閉めたがる
自分の頭を殴る	噛み付く
物を一列に並べる	常同行動

5) 家庭環境

親や家庭に自閉症の要因を想定している意見も見られた。「親の育て方に問題がありそう」「家庭で十分な子育てができない」「親が神経質」など、環境因に即した内容もあった。また、「親も自閉症が多い」

として、遺伝的な要因を含むようなものもあった。一方で、「親の育て方の原因はない」とはっきり言い切っているものも対極的な意見としてみられた。中には、「自分が親だったらつらいだろう」と親の立場で捉えようとしているものもあった。

No.5 家庭環境

環境の変化に対応できない	親が神経質
親の育て方に原因はない	親も自閉症が多い
自分が自閉症の子どもの親だったらつらいかもしれない	
家庭など個人をとりまく環境に問題を抱えている人がかかりやすい	

6) 性格の偏り

性格の問題と捉えているものとして、「わがまま」「ネガティヴ」「消極的」「自己中心的」「思い込みが激しい」

「性格的に神経質じゃないのか」などがあった。自閉症の行動特徴を、性格的な「わがまま」の範疇として理解しているものもある。

No.6 性格の偏り

自己中心的	性格的に神経質じゃないのか
わがまま	ネガティヴ
思い込みが激しい	消極的

7) かわいそう

「いろんなことにこだわらないと生活できないのは大変だ」「世の中に意味がわからないことが多いから

「かわいそう」などが挙げられており、障害があり大変、かわいそうレベルの意見も少数ではあるが挙げられていた。また自閉症の兄弟に目を向けているものもある。

No.7 かわいそう

意味がわからないことが多いからかわいそう	
いろんなことにこだわらないと生活できないのは大変	
親がいつもつきっきりでいないといけない	
周りのことが十分理解できないと思うのでつらい	
自閉症の兄弟がなんかかわいそう	
まわりから変な目で見られることが多いと思うのかわいそう	

8) すぐれた能力

自閉症には、突出した能力があるというイメージも強く、「記憶力」「芸術的(音楽・絵画)才能」「カレンダー」

などが挙げられていた。このような才能をもっているものが自閉症であるという認識も想定される。

No.8 すぐれた能力

変なことを覚えている(日付・歴史など)	潜在能力をもっている
好きなものを覚えたりする記憶力がすごい	映画「レインマン」で観た
何かの能力がズバ抜けている	音楽の才能
自閉症の子どもはすごい力をもっている子がたくさんいる	絵が上手

9) 学習力の問題

学習力の問題に関するものとして、「文字が書けない」「計算が速い」「難しい漢字をよく知っている」「ことばで考える問題に弱い」

とばで考える問題が弱い」などが挙げられていた。得意科目とそうでない科目の隔たりを意識した内容として捉えることもできる。

No.9 学習力の問題

文字が書けないが計算は速い
養護学校で勉強しているものが多い
ことばで考える問題に弱い

普通の学校の勉強は無理である
難しい漢字をよく知っている
他の子どもたちと一緒に勉強できない

10) 生活力の弱さ

自閉症児者の生活に関わるものとして、「親がいないと何もできない」「人の手を借りないと日常生活が送れない」「なかなか自立できない」などが挙げられ

ていた。

また、対極例として「日常生活では健常者とあまり変わらない」のではという意見もあった。

No.10 生活力の弱さ

親がいないと何もできない
一人で外出ができない
日常生活では健常者とあまり変わらない

人の手を借りないと日常生活が送れない
交通事故にあうことが多い
お金の管理が一人でできない。買物が無理

11) 存在感のあいまいさ

自閉症が自分の存在に不安定さを抱えているといった内容もあった。「自分が誰だかわからなそう」は、自閉症児者がどれだけ自分自身の存在の意味を理解しているのかといった立場で捉えようとしていることが

想定される。また、「自他の境界のあいまいさ」というより専門的な立場で述べているものもあった。対極例としては「自分なりの世界をもっている」という意見が見られた。

No.11 存在感のあいまいさ

自分が誰だか、わからなそう
他から来るものを敵とみなし不安になる
自分なりの世界をもっている

不思議な世界観をもっている
自分と他人との境界があいまいである

12) コミュニケーションの障害

自閉症の障害の本質的な部分である他者との「コミュニケーションのあり方」に多く触れている内容が見られた。「あやまれない」「友達にとけこめない」「人

に不快感を与える」「目を合わせない」「笑わない」「話しかけられても無視する」「他人を怖がる」など、他者との関わりに視点をあてたものとして捉えることはできている。

No.12 コミュニケーションの障害

あやまれない	友達にとけこめない
うまく会話できない	おどおどして落ち着きがない
うまく自分を表現できない	人に不快感を与える
抱っこを嫌がる	目が合わない
人付き合いが苦手	集団行動が苦手
他人を怖がる	悩みなどを人に相談できない
感情表現ができない	笑わない
気持ちを伝えるのが苦手	表情がない
自分のしたいことが優先	一人で遊んでいることが多い
ずっと黙っている	話かけられても無視してしまう
おもちゃや人の声に反応を示さない	人が言っていることをみんな自分のことだと思う

13) こころの問題

「コミュニケーションの障害」に次いで多かったのが、この「こころの問題」に関する内容であった。このふたつは隣接しているものもあるが、「情緒不安定」「あまり相手を信じられない」「気持ちのコントロール

が苦手」「自分が出せない」「さみしい」「自己主張が弱い」などがあった。自閉症は「こころの問題」を中心とした障害と捉えており、「病気」と「障害」認識のあいまいさが読み取れる段階である。

No.13 こころの問題

情緒不安定	強制されるのが苦手
自己主張が弱い	気持ちのコントロールが苦手
周りの子よりマイペース	自分の思い通りにならないとダメ
閉鎖的な考え方	あまり相手を信じられない
自分が出せない	精神不安定
いろんなことに敏感	自分に自信がもてない
何を考えているのかわからない	さみしそう

14) 発達の遅れ

まだ少数の意見ではあるものの、自閉症は「発達障害」であるということに踏み込んだ内容もあり、「脳のダメージ」「IQ」「発育の遅れ」「程度も軽重がある」

などの意見が見られた。これまでに何らかのかたちで「自閉症」について学んでいるということが想定される。

No.14 発達の遅れ

脳の発達が遅い	幼い・こども
IQが低い	障害のひとつ
発達・発育の遅れ	運動神経が発達していない
障害の軽い人も重い人もいる	長所と短所がある

15) 特別な支援

自閉症児者には支援が必要であるという捉えとして、「接し方に工夫がいる」「養護学校には行かず、普通の学校にも通っている」「カードを見せると理解しやすくなる」「きちんとていねいに教えればちゃんとできるようになる」「一日のスケジュールをあらかじめ教える」という意見が挙げられており、特別支援教育の基礎的な捉えをしているものもあった。系統的に学んできたり、中学・高校時代にボランティアや体験活動を行っている学生の意見として考えられる。

No.15 特別な支援

一人ひとりの子どもたちに対して、接し方に工夫がいる
障害をもっていても、可能性があると思うので、根気強く指導する
養護学校には行かず、普通の学校で特別に勉強する
理解しやすいように説明をする
カードを見せると理解しやすくなる
きちんとていねいに教えればちゃんとできるようになる
一日のスケジュールをあらかじめ教える

4. 考察

本研究で見出された結果をもとに、短期大学に入学したばかりの女子学生の「障害」に関する認識とそこ

で得られた結果を軸にした講義内容やあり方、教育的なアプローチについて考察していく。

1) 短期大学生の「自閉症」認識に関する構造モデル

短期大学生の「自閉症」認識に関する構造をモデル化して提示(図2)した。範囲内の数値は、回答総数を示している。縦軸には、「障害」と「病気」、横軸には、「内面性」と「外顔性」をとて、短期大学生の「自閉症」認識の位置づけを図った。まず、「病気」か「障害」かの概念や定義づけが曖昧なため、「自閉症」をその言葉の字義通りに「病気」の範疇に含んで捉えている学生が多くいた。一方、「内面性」と「外顔性」の軸で把握していくと、こころの問題と行動表出面(行動上の問題)のつながりを把握することができないため、互いの関連性に着目しないまま、どちらかに偏った捉え方をしていることが確認された。この認識レベルの構造化により、自閉症に関する講義では、ここで示された内容を整理し、関連づけた形で学生に提示していくことが望ましいと考えられる。

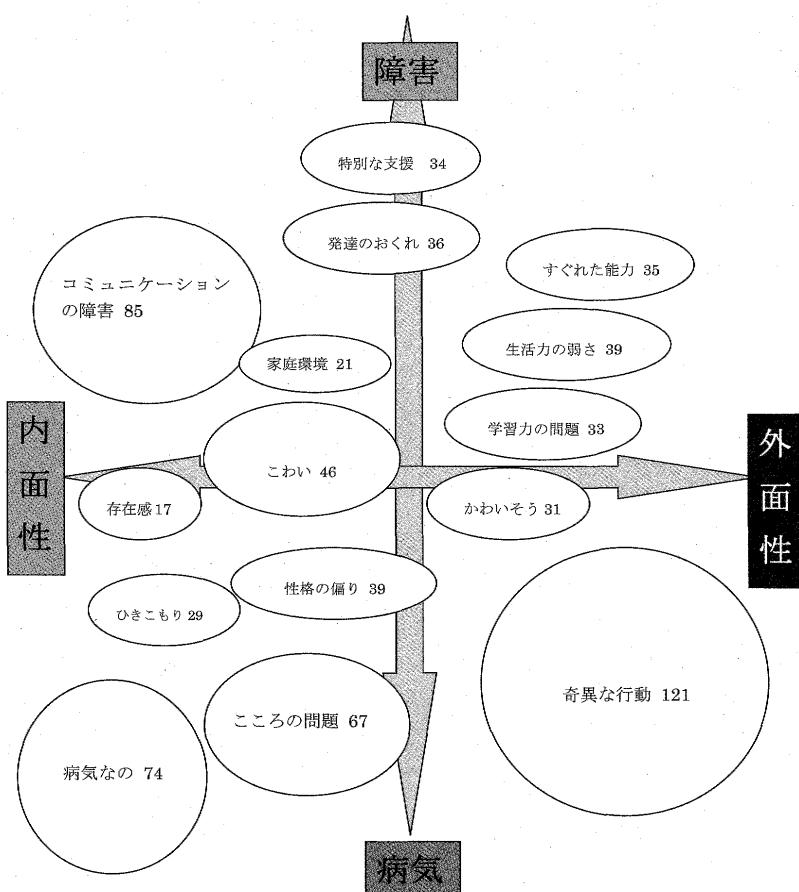


図1 短期大学生の「自閉症」認識に関する構造モデル

2) 「自閉症」に関する認識レベル

自閉症に関する認識レベルについては、一個人の中に、複数レベルのものが含まれていることがあり、一概に段階分けすることはできないが、今後の学生指導における知見として、仮説的に認識段階モデル図の作成を試みた。

第1段階：自閉症の行動特徴を部分的、表面的に捉えているため、不可解な行動や際立った執着行動による恐怖心が高い段階といえる。

第2段階：自閉症を病気と捉えているため、治療すれば治るものとして考えている場合やこころの病として認識しているために、ひきこもりをはじめ、心身症などとほぼ同一視している段階といえる。

第3段階：自閉症の要因を家庭環境や保護者の養育のあり方として捉えているもので、「TVの見せすぎ」や「母親の養育態度」「冷ややかな家庭」「親の愛情不

足」などが主な要因として考えられている段階である。

第4段階：通常の学校での勉強についていけない、一人での生活に様々な困難を伴うなどの観点から自閉症を捉えている段階である。何らかの能力的な障害が、その子どもの成長や発達の妨げとなっていることを認識してはいるが、まだ、健常な子どもたち（自分自身）との比較の上で考えている段階である。

第5段階：自閉症を「発達の遅れ」として位置づけつつあり、自閉症に特徴的とされる対人関係やコミュニケーション、創造力、ことばの問題、特異とされる行動特徴などを挙げながら、自閉症を理解しようとしている段階である。

第6段階：自閉症を「発達障害」と認識した上で、保育・教育的な知見から自閉症の子どもたちに対する支援のあり方について検討しようとしている段階である。

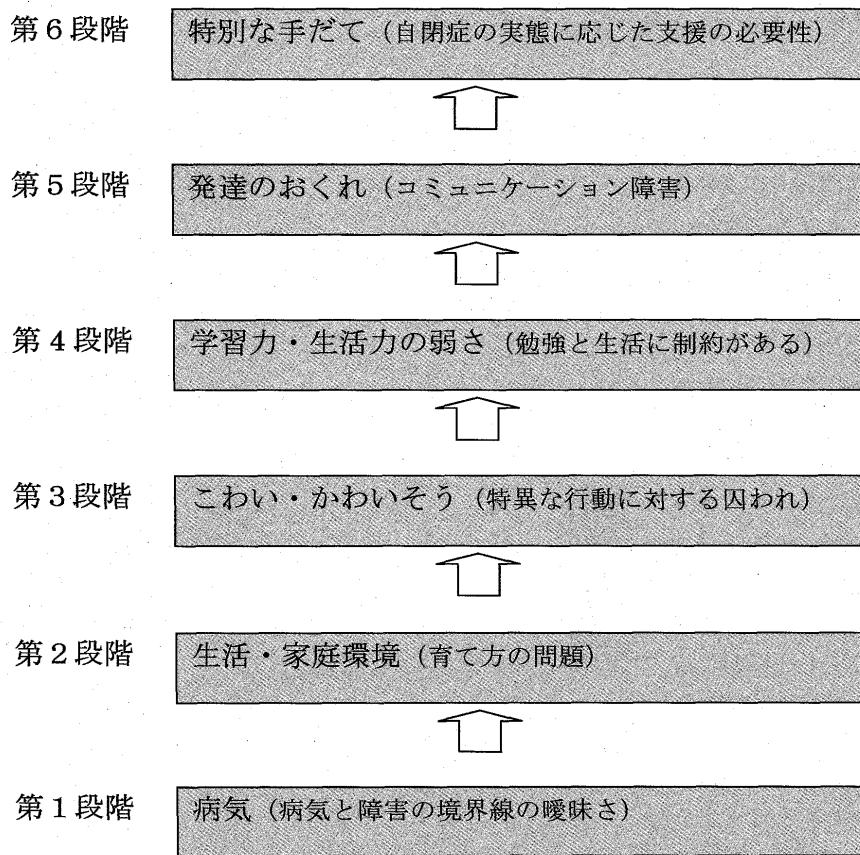


図2 「自閉症」に関する認識レベルの段階

3) 「障害児保育・教育」講義に関するアプローチのあり方

短期大学に入学してきたばかりの学生にとっては、「障害」に関する問題意識はもちろんのこと、「自閉症」に関しても白紙の状態および偏った認識を抱いている者がほとんどである。個人的な体験や経験、学びの過程など、若干の認識レベルの相違はあるものの、基本的な「障害」の捉えや考え方についてじっくりと時間をかけて取り組んでいくことの必要性が見出された。まず取り組むべきことは、偏った認識を徐々に取り除いていくことであり、そのためにも、障害をもった子どもたちの実態や実状に即した具体的課題の選定と基礎的な知識とを融合させながら講義内容を検討していくことはならないだろう。特に、学生に対しては、障害をもった子どもたちのイメージをもたせながら、ICFで明示されている「個人要因」と「環境要因」「社会的な問題」についてバランスよく説いていくことも求められてくるだろう。さらに、入学時点において、「障害」問題や「自閉症」などに関する知識や経験に若干の差があることが見出された。「障害」や「自閉症」に関して、より高い認識レベルをもっている学生を引き込みながら、リーダー的な存在として位置づけ、講義の中で学生同士が議論していく場の中心となっていくことができるような働きかけも必要であると考える。一方的な知識注入の場としてではなく、お互いが率直に意見を交わしながら、より建設的、発展的な「障害」認識の獲得に向けて講義内容や教材・教具の選定が求められる。

5. 今後の課題と展望

本研究では、短期大学生の「障害」に関する認識レベルを把握するために、あえて、十分認知されていない「自閉症」をテーマとして検討を行った。各学生が短期大学入学前に受けた「障害」や「福祉」「ボランティア」関連の知識や技能、体験などには大きな開きが認められ、これによって、その後の問題意識に差が現れていることが想定される。短期大学では、基本レベルをしっかりと押さえながら、段階的に理論と実践の融合に向けた緻密な取り組みが求められよう。今後は、この基礎研究を踏まえた上で、一人ひとりに半構造的なインタビューを行いながら、将来、保育士や幼稚園教諭を志望している短期大学生に対する「障害」に関する認識レベルの構造化を図り、保育士養成機関における「障害児保育・教育」や実習事前指導のあり方について追究していきたいと考える。また、講

義内容・実践のあり方と学生の認識レベルの向上との関係性についても、実際の講義を批判的に検討しながら、その効果について問い合わせていく姿勢が指導者には求められると考えている。

【文献】

- 川喜多二郎(1967) 「発想法－創造性開発のために－」, 中公新書.
- 川喜多二郎(1970) 「続・発想法－KJ法の展開と応用」－, 中公新書.
- 木下康仁(2003) 「グラウンデッド・アプローチの実践」, 東京弘文堂.
- 西條剛央(2005) 「構造構成主義とは何か－次世代人間科学の原理－」, 北大路書房.
- John Mcleod(2000) 「Qualitative Research in Counselling and Psychotherapy」, 下山晴彦[監修], 谷口明子・原田杏子[訳](2007) 「臨床実践のための質的研究法入門」, 金剛出版
- 西山修・富田昌平・田爪宏二(2007) 保育者養成校に通う学生のイデンティティと職業認知の構造, 発達心理学研究, 18(3), p196-205..
- 浜谷直人(2005) 巡回相談はどのように障害児統合保育を支援するか：発達臨床コンサルテーションの支援モデル, 発達心理学研究, 16(3), p300-310.
- 松井剛太(2007) 発達障害のある幼児の理解と支援を促す保育カンファレンスフォーカス・グループ・インタビュー(FGI)の実施から－, 発達障害研究, 29(3), p185-192.
- やまだようこ(1997) 「現場心理学の発想」, 新曜社.

Cognitions of junior college students regarding "autism"

Takaaki Ishiyawa, Takashi Abe

Department of Children, Saitama Junshin Junior College

Makoto Tanaka

Department of Early Childhood Care and Education

Course, Shujitsu Junior College

Key words; Junior college students, autism, short report,

KJ method, qualitative research

Abstract

A cognitive model of female junior college students studying to be nurses and nursery school teachers about early childhood care was developed based on the analysis and interpretation of short reports regarding autism given at a lecture on education for children with developmental disabilities. Based on the model, the content of practical training at facilities for the handicapped and lectures on education, as well as the care of children with developmental disabilities were examined. The results indicated 15 concepts regarding the cognition of autism, which were used to develop the following six cognitive categories; [sickness] , [environmental factors] , [fear and pity] , [poor learning ability and life capacity] , [developmental disability] , and [special support] . Based on these results, it is suggested that conducting semi-structural interviews and elaborating the cognitions of junior college students regarding disorders, will help to develop appropriate education and care for handicapped children, as well as provide appropriate guidance for practical training.